スラブ・ユーラシア研究センターニュース　季刊　2016年 147 号

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No. 147 November 2016

研究の最前線

◆　2016 年度冬期国際シンポジウム　◆
25 Years After: Post-Communism's Vibrant Diversity
開催予告

今年度の冬期シンポジウムが 12 月 8 日（木）～9 日（金）に、「体制転換から四半世紀：ポスト共産主義社会の多様化を再考する」というタイトルで実施されます。25 年前の 1991 年といえば一般的にはソ連が解体した年として記憶されていますが、ユーゴスラヴィアが解体し紛争が始まったのもやはりこの年ですし、また実は東欧で最後の「初回の完全な自由選挙」がポーランド（とブルガリア）で実施されたのもこの年です。このようなことから 1991 年は、「体制転換の第一段階が終了した年」ということができるかもしれません。この年から 25 年、かつて社会主義体制のもとにあった国々の間には、社会主義期に存在していたよりもはるかに大きな相違が現れています。今回のシンポジウムでは政治、経済、社会、言語と多面的な視点から、ポスト社会主義国の間の相違を検討することを試みます。プログラムは以下のとおりです。［仙石］

12 月 8 日（木）

10:00-12:00 セッション 1: 体制転換の有無とドイツの境界

司会 : 柑本英雄（実践女子大学）

木村護郎クリストフ（上智大学）「脱領域化の兆候か：ドイツ・ポーランド国境における言語景観」

ダグマラ・ヤイェシニャク＝クワスト（ヴィアドリナ欧州大学・フランクフルト）「ドイツ・ポーランド国境：体制転換から欧州統合の現段階まで」

マーティン・クラット（南デンマーク大学）「体制の違いと再境界化との狭間で：欧州の平和な国境たるドイツ・デンマーク国境地域での統合協力の難しさ」

討論 : 福田宏（愛知教育大学）

13:00-15:00 セッション 2: 社会・政治変化の転換点とスラブ・ユーラシアにおける言語変化

司会：越野剛（SRC）

ギュンター・シャールシュミット（ヴィクトリア大学）「スラヴ世界におけるかつての二言語併用状況での英語の進出とその結果としての三言語辞書編纂の新しい方法論」

野町素己（SRC）・ウェイルズ・ブラウン（コーネル大学）「新たに認知された古い言語：旧ユーゴスラヴィア解体後における造成言語とその変化」

トマシュ・ヴィヘルキェヴィッチ（アダム・ミツキェヴィッチ大学・ポズナン）「ポーランドの（少数話者）諸言語：1989 年以降の動態の変化」

討論：丹菊逸治（北大アイヌ・先住民研究センター）

15:30-17:30 セッション 3: 国家セクター改革の比較：ロシア、中国、インド

司会 : 安達祐子（上智大学）

イリヤ・マトヴェエフ（ロシア経済・行政アカデミー）「実現していない私有化：2009 ～ 2016 年におけるロシアの国有セクター改革政策」

丸川知雄（東京大学）「中国における失業の地域格差」

福味敦（兵庫県立大学）「インド電力改革の現状と課題」

討論：田畑伸一郎（SRC）

12 月 9 日（金）

10:00-12:00 セッション 4: ポスト共産主義社会における家族と国家

司会：長縄宣博（SRC）

ヨランタ・アイドゥカイテ（リトアニア社会調査センター）「バルト諸国における子供を持つ家族への支援：2004 年以降の拡大と削減の経緯」

仙石学（SRC）「少子化問題に対処する：東欧と日本の比較から」

五十嵐徳子（天理大学）「ポストソヴィエト期のロシアにおける高齢者ケア」

討論：中地美枝（SRC）

13:00-15:00 セッション 5: ユーラシアにおける腐敗と反腐敗

司会：岡奈津子（日本貿易振興機構アジア経済研究所）

アレクサンダー・クパタゼ（キングス・カレッジ・ロンドン）「ポストソヴィエト・ユーラシアにおける政治・犯罪関係の多様性の分析」

ディナ・シャリポヴァ（キメプ大学・アルマトゥ）「教育分野における国家の退却と非公式な支払い：カザフスタンの事例」

油本真理（SRC）「プーチン時代のロシアにおける反腐敗キャンペーンをめぐる政治：政権・反体制派・『全ロシア人民戦線』」

討論：デイヴィッド・ウルフ（SRC）

15:30-17:30 セッション 6: ネオリベラリズムとその敵：ポスト共産主義国をめぐる戦い

司会：林忠行（京都女子大学）

ピーター・ラトランド（ウェスリアン大学）「ネオリベラリズムとその代替：旧ソ連諸国の 25 年の移行を振り返る」

パヴォル・バボシュ（コメンスキー大学）「異なっているが、それでも同じか？：チェコとスロヴァキアの経済政策におけるネオリベラリズム」

吉井昌彦（神戸大学）「ネオリベラリズムか EU コンディションか：中東欧とバルカン諸国の経済政策」

討論：上垣彰（西南学院大学）

◆ JIBSN 設立 5 周年記念シンポジウム開催される ◆

10 月 25 日、東京・竹芝ふ頭の隣にあるアジュール竹芝を会場として、境界地域研究ネットワーク JAPAN（JIBSN）5 周年記念シンポジウムが開催されました。JIBSN の年次セミナーも兼ねており、今回は小笠原村による組織です。渋谷正昭・小笠原村副村長による基調講演

に始まり、「境界地域の世界遺産登録を考える」、「JIBSN 5 周年：成果と展望」という二つのパネルセッションが組まれ、議論は大いに盛り上がりました。JIBSN は境界問題の研究者と境界自治体の行政実務者とが情報共有・協働をするプラットフォームとして機能してきました。国境離島新法の制定に加え、ボーダーツーリズムの振興、境界自治体でのインターンシップなど着々とその成果を生み出しています。シンポジウムでは、二代目の代表幹事である財部能成・対馬市前市長など、JIBSN 設立時からの功労者の方々が顔をそろえました。懇親会では、JIBSN でしかありえない日本の国境地域の銘酒が勢ぞろいし、大いに盛り上がりました。［岩下／地田］

発言する石垣雅俊･根室市副市長（左は比田勝尚喜・対馬市長）

◆　UBRJ：沖縄・竹島・北方領土、3 セミナーで延べ 228 人を動員　◆

セミナーのようす（中央がストレリツォフ氏）

境界研究ユニット（UBRJ）は、9 月から 10 月にかけて、沖縄基地問題、竹島／独島問題、北方領土問題というアクチュアルなテーマに関する 3 つのセミナーを開催しました。9 月 21 日の「沖縄と海兵隊」セミナーでは、新刊の『沖縄と海兵隊：駐留の歴史的展開』（旬報社刊）の著者が一堂に会して、沖縄の基地問題の歴史的側面について報告・議論をおこないました。9 月 30 日の「我らが独島、我らが竹島」セミナーでは、センターの客員研究員を務めたこともあるアレクサンダー・ブフ氏（ウェリントン大学）をお迎えし、日韓の自称「市民活動家」による記録映像の視聴とその内容に関する議論をおこないました。10 月 6 日の「北方領土問題：日露の認識と関係を問い直す」セミナーでは、ロシアでの日露関係のオピニオンリーダーの一人であるドミトリー･ストレリツォフ教授（モスクワ国際関係大学）をお迎えし、加藤美保子（センター特任助教）の的確なモデレートの下、12 月に予定されているプーチン大統領訪日による北方領土問題の行方などについて熱い議論が交わされました。沖縄セミナーに 83 人、竹島／独島セミナーに 44 人、北方領土セミナーに 75 人と、多数の市民の方にお越しいただき、熱気あふれる議論が展開されました。［岩下／地田］

◆　UBRJ：UBRJ セミナー「南アジア地域における宗教と肉食」を開催　◆

10 月 21 日、慶應義塾大学の宮本万里氏をお招きして、久々に文化人類学のテーマを扱った UBRJ セミナーが開催されました。副題は「国境を越える牛の屠（ほふ）り」と題し、インドやブータンでの宗教政策と牛を「屠る」という行為が地域の社会や経済にどのような影響をおよぼしているのか、国境を越える家畜の移動の問題も踏まえつつ論じていただきました。宗教・経済・生業・環境・国境等々、地域における人間の営みにかかわる現象を研究する場合、それにまつわる政策や実践だけでなく、政策の執行や、政策と実践との間の歪み、その解決方法など、複

講師の宮本万里氏

雑な要素の網の目をほどいてゆかねばなりません。このような学際的な地域研究／境界研究の醍醐味を味わわせてくれる報告でした。宮本氏は、2009 年から 2011 年までグローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」で学術研究員としてセンターに勤務していました。宮本氏のような多くの若手研究者がセンターを巣立ち、日本の大学・研究機関で活躍を続けています。［地田］

◆　2016 年度特任教員（外国人）決定　◆

2016 年度の外国人特任教員として以下の 9 名が採用され、すでに赴任またはこれから赴任の予定となっています。

なお、2015 年度からセンターの外国人特任教員の選考方法が変更され、応募者の中からセンター内部で候補者を絞って申請をおこない、大学全体の「外国人招へい教員選考委員会」による審査を経て最終的に決まるという方式に変わっています。（以下、アルファベット順）

アイドゥカイテ、ヨランタ（Aidukaite, Jolanta）
所属・現職：リトアニア社会研究センター　上級研究員
研究テーマ：ポスト・ソヴィエト期のバルト三国における福祉制度
滞在期間：2016 年 6 月 1 日～ 2016 年 9 月 30 日
受入教員：仙石

アレクサンドロフ、アレクサンドル（Alexandrov, Alexander）
所属・現職：ロシア科学アカデミー文学研究所　研究員
研究テーマ：ロシア帝国のメディア界におけるレフ・トルストイ（1900 年～ 1910 年代初頭）
滞在期間：2016 年 10 月 21 日～ 2017 年 4 月 28 日
受入教員：越野

バボシュ、パヴォル（Babos, Pavol）
所属・現職：スロヴァキア科学アカデミー予測研究所　下級研究員
研究テーマ：共産主義後ヨーロッパにおけるネオリベラリズムと民主主義化の支援
滞在期間：2016 年 7 月 1 日～ 2017 年 1 月 31 日
受入教員：仙石

ベリッチ、ボヤン（Belić, Bojan）
所属・現職：ワシントン大学・スラヴ言語・文学部　主任講師
研究テーマ：ヴォイヴォディナの諸言語：少数民族にとっての展望
滞在期間：2016 年 6 月 15 日～ 2016 年 8 月 15 日
受入教員：野町

グラント、ブルース（Grant, Bruce）
所属・現職：ニューヨーク大学・人文社会学部・人類学科　教授
研究テーマ：のろまな戦争：コーカサス・ムスリムにおける風刺、フリースピーチ、そして政治的イメージ

滞在期間：2017 年 1 月 18 日～ 2017 年 3 月 30 日
受入教員：長縄

カチマルスキ、マルツィン（Kaczmarski, Marcin）
所属・現職：ワルシャワ大学国際関係研究所　助教授
研究テーマ：ユーラシア経済同盟と新シルクロード経済圏構想：競争と協力の間で
滞在期間：2016 年 9 月 1 日～ 2017 年 3 月 29 日
受入教員：岩下

ミトロヒン、ニコライ（Mitrokhin, Nikolay）
所属・現職：ブレーメン大学・東欧研究センター　研究員
研究テーマ：東・南ウクライナの親ロシア分離主義
滞在期間：2016 年 9 月 1 日～ 2017 年 3 月 24 日
受入教員：高橋

ウィートクロフト、ステファン（Wheatcroft, Stephen）
所属・現職：メルボルン大学・人文学部・歴史学哲学科　教授研究員
研究テーマ：1929-1960 年のウラル地方、シベリア、ロシア極東、そして東アジアにおける食料問題と人口問題
滞在期間：2017 年 1 月 5 日～ 2017 年 3 月 24 日
受入教員：ウルフ

ヴォイノフスキ、ズビグネフ（Wojnowski, Zbigniew）
所属・現職：ナザルバエフ大学・人文社会科学部　助教授
研究テーマ：共産圏での資本主義構築：ソヴィエト・ユーラシアの音楽産業（1976-91）
滞在期間：2017 年 1 月 5 日～ 2017 年 7 月 5 日
受入教員：長縄　［山村］

◆　国際若手ワークショップの開催　◆

2015 年の幕張での国際中欧・東欧研究評議会世界大会には東アジアの多くの研究者が参加し、新しい時代の幕開けとなりました。とりわけアジアの若手研究者の参加が目を引き、今後のスラブ・ユーラシア研究にとって頼もしい限りでした。

幕張の遺産を引き継ぎ、国や大学の壁を越えて、次世代の研究者をいかに共同で育ててゆくかが今後の課題です。そうした継承・発展の一翼を担うべく、ロンドン大学のスラブ東欧研究所、及びハンガリーのセゲド大学歴史学部、及びスラブ・ユーラシア研究センター家田研究室が共催して、国際若手ワークショップを開催しました。会期は 9 月 19 日から 26 日で、19 日から 22 日がロンドン、23 日から 26 日がハンガリーでした。スラブ・ユーラシア研究の新地平とレジリエンスを通底のテーマとして、世界各地の 7 ヵ国（日本、韓国、ジョージア、ハンガリー、イギリス、タジキスタン、アメリカ合衆国）から若手の研究者が集い、イギリス、ハンガリー、日本、ウズベキスタンの先輩研究者から助言を受けました。また、先輩研究者も現在進行中の研究を披露し、早朝からセミナー後の夜遅くまで、世代を超えて活発な議論がなされました。

ロンドン大学スラブ東欧研究所 UCL SSEES は世界で最初にして最大のスラブ・ユーラシア研究組織であり、昨年、創立 100 周年を迎え、新たな 100 年を目指し、アジア諸国のスラブ・ユーラシア研究と連携を深めようとしています。今回の国際ワークショップはその一環でもありました。またハンガリーのセゲド大学は同国を代表する総合大学で優秀な歴史研究者を数多く集

スラブ東欧研究所のマサリク・ルームに貼られたワークショップのポスター

めています。またセゲドは大学を核にした静かなたたずまいの大学町で、東アジアや英米からの参加者を魅了しました。

以下は若手研究者の報告テーマです。

・Linda Margittai, University of Szeged, **Wartime Voivodina and the 'Jewish Question' in the Context of a Multi-ethnic Society**

・Tsotne Tchanturia, Corvinus University, **Dissolution of the Soviet Union and Advantages of It for the Soviet Elite**

・Seonhee Kim, University of Washington, **Government Responses to Protests in Authoritarian Regimes: Perspectives of Government and Civil Society and Analyzing Framework**

・Nazira Sodatsayrova, University of Tsukuba, **Educational Migration from Central Asian Countries: Tajik Students in Japan**

・Philip Barker, UCL SSEES, **Development of Hungarian Political Rhetoric, 1790-1848**

・Kwang Jin Seo, Seoul National University, **The Concept of Courage in Radishchev's Works**

・Peter Vukman, University of Szeged, **Political Emigration from Communist Yugoslavia**

・Kenshi Fukumoto, Kyoto University, **A Post-colonial Reflection on Factory Workers in Łódź, 1864-1914**

・Noriko Tsujikawa, Kinki University, **The Relationship between the UK and Hungary Concerning the International Labour Movement around 1920**

・Yuko Kambara, Kitakyushu University, **'Self-governance' in Local Politics under the Neoliberal Tendency: Anthropological Analysis in a Post-socialist Slovak Village**

若手報告者はロンドンとセゲドで二回ずつ報告し、それぞれ異なる討論者から厳しく批評を受けました。また二回目の報告では最初の報告時に受けた批評を盛り込んで改善することが求められました。批評者としてはスラブ東欧研究所から所長の Jan Kubik、副所長の Zoran Milutinovic、Tom Lorman、Anne White、Simon Dixon、Pete Duncan 等の錚々たる研究者がそろい、ハンガリーからは Béla Tomka、Stefano Bottoni、László Karsai、Péter Bencsik などセゲド大を中心とした第一線の研究者が名を連ねました。日本からはウイーンで研究活動を続けているスラ研の大先輩である皆川修吾氏と筆者が、また中央アジアで調査中の筑波大のティムール・ダダバーエフ氏が調査地から駆けつけました。

先輩研究者の報告は以下のとおりで、若手研究者は先輩たちの作業過程にあるテーマに接し、大きな刺激を受けました。

・Tim Beasley-Murray, UCL SSEES, **The Right to Write? The Ethics of Authorship**

・Stefano Bottoni, Hungarian Academy of Sciences, **Physical Violence in Communist Romania before and after 1956: An Overview**

・Jelena Calic, UCL SSEES, **The Politics of Teaching 'a Language Which Is Simultaneously One and More Than One': The Case of Serbo-Croatian**

・Richard Mole, UCL SSEES, **Migration and Sexual Resocialisation**

・Jan Kubik, UCL SSEES, **Culture, Politics, Both? Towards an Explanation of the Populist 'Right Turn' in the Post-communist World and Beyond**

・Ivan Balog, University of Szeged, **Hungarian Politics Today: The Paralysis of the Opposition**

・Shugo Minagawa, Hokkaido University, **Parliamentarism under a Passing Phase of Consociationalism: The Role of 'the Greens' in the Institutionalization of Austrian Parliamentarism**

セゲドでの会場となった科学アカデミーの前で集合写真

・Péter Bencsik, University of Szeged, **Cold Wars among the Eastern European Communist States: An Overview**

・Béla Tomka, University of Szeged, **Revisiting Long-term Economic Performance in East Central Europe: Twentieth-century Hungary in an International Comparison**

セゲドでの日程を終えたあと、9 月 26 日にはブダペストのコルヴィヌシュ大学で特別セミナーがワークショップ参加者のために開催され、以下の報告がなされました。

Seminar at the Cold War History Research Center at Corvinus University of Budapest

・László Csicsmann, Dean, Faculty of Social Sciences and International Relations: **Opening Remarks**

・Csaba Békés, Director, Cold War History Research Center, **The Soviet Bloc and the Cold War** (via Skype from Columbia University in New York)

・Tsotne Tchanturia, Research Coordinator, Cold War History Research Center, **Presentation on the Activity of the Cold War History Research Center**

・János Kemény, Postdoctoral Fellow, Hungarian Academy of Sciences, **Soviet Bloc Policy towards the Vietnam War**

・Gusztáv Kecskés, Institute of History, Hungarian Academy of Sciences, **Hungarian Refugees and the Western World: Migration after the 1956 Hungarian Revolution**

・Csaba Horváth, Independent Scholar, **Ethnic Conflicts in East-Central Europe during the Cold War**

参加した若手研究者からはワークショップ終了後、

"I personally found the discussions very engaging, thought-provoking and useful. I believe all participants could greatly benefit from it."

あるいは

"by bringing together scholars from a really wide variety of fields, countries and institutions, the workshop opened up new horizons and great opportunities for future scholarly cooperation."

"all the participants had plenty of time to talk to each other outside the official programmes. In London we enjoyed discussing and exchanging our ideas with each other during the coffee break and lunch time; in Szeged we did so even at the breakfast time. These casual talks were full of academic inspiration and I learned a lot from them. The second reason, which I think was more

若手研究者の報告風景

significant than the first one, was that all the participants were allowed to discuss their research topics without telling their own ethnic origins. I have seen PhD students advised to choose their thesis topics related to their own ethnic backgrounds so that they could provide their research community with a "neutral point of view from outsiders."

「自分がこれまで経験したかぎり最も長く、濃いワークショップだった。個人的にも、ロンドンもセゲドも初めて訪れる都市であったのでよい経験になった。・・・今回のワークショップを通じて、これから多くの研究者と共同で議論してみたい論点が自分なりにみえてきた。」

「期間中はほぼ同じメンバーが行動を共にしたことで、通常の国際学会とは比較にならないほど議論を重ねることができた。報告者はロンドンとセゲドで 2 回の報告の機会があり、それぞれのコメンテーターから丁寧なコメントを得ることができたことは、貴重な機会であった。」

「現地と日本という二者関係でもなく、また現地からの参加者が少数しかいない国際学会でもなく、参加者の出身国のバランスがとれたワークショップというのは珍しく、この企画の実現に尽力いただいた関係の先生方に深く感謝したい。」

などの感想が異口同音に寄せられました。また、

"I think it should be decided whether it will be a yearly or a biennial event and/or it will take place at one or two places."

など、次回の開催をも求める多くの声に後押しされ、英・ハ・日の組織者は来年に向けて準備を始めています。［家田］

◆　中国社会科学院外国文学研究所セミナーおこなわれる　◆

9 月 13 日にセンターおよび日本ロシア文学会北海道支部との共催で「現代中国におけるロシア文学受容」が開催されました。中国側からは北京にある中国社会科学院外国文学研究所の侯瑋紅、徐楽、侯丹の 3 名が研究報告をおこない、望月恒子、岩本和久、越野剛が討論者となりました。

とりわけ中国におけるロシア文学作品の翻訳の現状や日本との相違点について興味深い議論が交わされました。［越野］

◆　上智大村田ゼミ学生との合同セミナー　◆

10 月 8 日（土）に上智大学外国語学部ロシア語学科の村田真一教授のゼミ生 15 名が参加する交流会が実施されました。

ロシアの文学、演劇、映画、音楽、建築などの研究発表は、卒業論文を目標にしたもので非常に熱意のあるものでした。中には大学院進学を考える学生もいるようです。スラブ社会文化論講座からも佐々木・上村の修士 2 名が研究報告をおこないました。［越野］

◆ 田洪敏氏の滞在 ◆

上海師範大学副教授の田洪敏氏（ロシア文学）が 10 月 8 日から 28 日までセンターに滞在しました。図書館の豊富なロシア語資料を用いて研究を進めたほか、10 月 22 ～ 23 日に北大で開催されたロシア文学会全国大会に参加し、現代ロシア文学についての研究パネルで報告をおこないました。［越野］

◆ 封安全氏の滞在 ◆

黒竜江省社会科学院ロシア研究所の副研究員（准教授に相当）の封安全さんが 10 月 7 日から 11 月 11 日までセンターに滞在され、主として北極海開発の問題を研究されました。封さんはセンターの大学院（文学研究科スラブ社会文化論）で勉強され、2009 年に博士号を取得された方です。11 月 8 日に開かれたセミナーでは，「中ロ経済協力の現状と今後の課題」と題する発表をされました。滞在中には、北極域の開発や中ロ国境間の経済交流の領域で、今後、研究協力を進めることについても話し合いをおこないました。［田畑］

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 146 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。［大須賀］

8 月5-6 日　国際シンポジウム「スラブ諸国における標準語イデオロギー」　Tore Kristiansen（コペンハーゲン大、デンマーク）“Late-Modern Sociolinguistic Change and the SL/SLI Complex”; Curt Woolhiser（ブランダイス大、米国）、**野町素己**（センター）、Bojan Belić（センター）“Round Table: Minority Languages’ Standardization”; Christina Kramer（トロント大、カナダ）“Language Ideology in Macedonia: Language Laws, Changing Orthographies, and the New Pravopis”; Marko Stabej（リュブリャナ大、スロヴェニア）“Standard Language Ideologies in Slovenia”; Grace E. Fielder（アリゾナ大、米国）“Recalibrating the Norms in a Standard Language Culture: The Case of Bulgarian”; **三谷惠子**（東京大）“DALIKANJE: DA LI JE TO LOŠE? (Is That Bad?): Realia of Language Use and Standard Language Ideology in Croatia”; Bojan Belić（センター）“Standard Language Ideology without a Standard? The Varying Views of the Standard (Serbian) Language in Present-Day Serbia”; Robert Greenberg（オークランド大、ニュージーランド）“The Role of Language Ideology in the Standardization of the Newest South Slavic Languages: Bosnian and Montenegrin”; Mark Richard Lauersdorf（ケンタッキー大、米国）“Standard Language Ideology in the Slovak-Speaking Region of Central Europe: Controlling Space and Time, Form and Function”; **野町素己**（センター）“Standard Languages and Standard Language Ideology in Poland”; Laada Bilaniuk（ワシントン大、米国）“The Affective Dimension of Standard and Non-Standard Language Use in Ukraine”; Curt Woolhiser（ブランダイス大、米国）“Standard Languages and Standard Language Ideologies in Post-Soviet Belarus”

8 月　8 日　「スポーツ・ビジネスの国際比較」研究会　**服部倫卓**（ロシア NIS 貿易会）「ロシアにおける国家・ビジネス・サッカーの関係」；**大平陽一**（天理大）「サッカービジネスとスタジアムの変貌」

8 月 12 日　科研費「ウクライナ動乱」研究会　**藤森信吉**「ウクライナ出張報告：ドネツク人民共和国渡航講座」「人民共和国の経済史」

8 月20-21 日　研究会「紅い星に願いを：社会主義文化の伝播と比較」　**梅津紀雄**（工学院大）「日ソ文化交流とうたごえ運動」；**亀田真澄**（東京大）「ライフスタイル表現としてのフォトエ ッセイ：モスクワ、ベルリンからニューヨークへ」；**杉村安幾子**（金沢大）「中国人留学生の日本における社会主義受容：旧制高校留学生を中心に」；**田村容子**（福井大）「紅い革命バレエの系譜：ソ連・中国・ベトナムの社会主義バレエ」；**越野剛**（センター）「ソ連、中国、ロシア：戦争映画『朝焼けは静かに』のリメイク」；**加部勇一郎**（北大・文）「同じ顔の戦士たち：アニメ『葫蘆兄弟』における継承と展開」；**坂川直也**（京都大）「抗米救国（ベトナム）戦時下、ベトナムのアニメ映画における戦争のイメージ」；**南雲大悟**（日本大）「中国のアニメ：《よい動漫》・《わるい動漫》」；**井上徹**（著述業）「ソビエトアニメの日本への影響：宮崎駿らの事例から」；**門間貴志**（明治学院大）「北朝鮮におけるコメディ映画」

8 月 24 日 Andrey Gubin（極東連邦大、ロシア）“Russian New Oriental Diplomacy: Peculiarities in New Upheavals”（UBRJ セミナー）
8 月 29 日 **醍醐龍馬**（大阪大・院）「明治政府と帝政ロシア：日露新時代の幕開け」；**山脇大**（京都大・院）「ロシアのエネルギー資源開発と環境運動に関する一考察：北極海における国際環境 NGO 拿捕事件を手掛りとして」（鈴川・中村基金奨励研究員報告会）
9 月 13 日 特別セミナー「現代中国におけるロシア文学受容」 **侯瑋紅**（中国社会科学院外国文学研究所）「現代ロシア文学」；**徐楽**（同）「チェーホフ」；**侯丹**（同）「ゴーゴリ」
9 月 21 日 **屋良朝博**（フリージャーナリスト）「本の紹介：『沖縄と海兵隊』」；**川名晋史**（平和・安全保障研究所）、**齊藤孝祐**（横浜国立大）、**山本章子**（沖縄国際大）「沖縄と海兵隊：ボーダースタディーズからよむ日米関係」（UBRJ ／ NIHJ セミナー）
9 月 30 日 **アレクサンドル・ブフ**（ウェリントン大、ニュージーランド）、**岩下明裕**（センター）「我らが独島、我らが竹島 日韓の領土問題認識を撃つ」（UBRJ ／ NIHJ セミナー）
10 月 2 日 第 28 回一緒に考えましょう講座 **大島堅一**（立命館大）「原子力発電の経済問題」
10 月 3 日 Nikolay Mitrokhin（センター）「2016 年のウクライナ南部諸地域：政治・経済状況（現地調査の成果から）（ロシア語）」（センターセミナー）
Sergii Geraskov（ドネツィク国立技術大、ウクライナ）“Japan’s Image in Ukraine: Myths and Reality”（センターセミナー）
10 月 6 日 **ドミトリー・ストレリツォフ**（モスクワ国際関係大、ロシア）、**岩下明裕**（センター）「北方領土問題：日露の認識と関係を問い直す」（UBRJ ／ NIHJ セミナー）
10 月 7 日 第 18 回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 **家田修**（センター）「『終わらない時間』、チェルノブイリ 30 年、福島 5 年」
10 月 11 日 Ilja Viktorov（ストックホルム大、スウェーデン）“When Monetary Power Autonomy Matters: Political Economy of the 2014-15 Financial Crisis in Russia and Its Macrofoundations”（センターセミナー）
10 月 19 日 **齋須直人**（京都大・院）「過去 40 年間の日本における『白痴』受容」（鈴川・中村基金奨励研究員報告会）
10 月 20 日 公開講演会 **津田敏秀**（岡山大）「低線量被曝による健康影響：とくに放射能被曝と甲状腺癌との疫学的因果関係」
10 月 21 日 **宮本万里**（慶應義塾大）「南アジア地域における宗教と肉食：国境を越える牛の屠り」（UBRJ セミナー）
10 月 24 日 **金沢美知子**（東京大学名誉教授）「18 世紀、ロシアに旅した人びと：グランドツアーと逆グランドツアー」（北海道スラブ研究会）
10 月 28 日 **麓慎一**（新潟大）「帝政ロシアによる沿海州地域の獲得と日本社会：ポサドニック号事件を中心に」（客員研究員セミナー）
11 月 4 日 Sanja Vulić（ザグレブ大、クロアチア）“Latest Dialectologial Observation of the Language of Faust Vrančić: Lexis in the Focus”（特別セミナー）
11 月 5 日 第 29 回一緒に考えましょう講座 **成元哲**（中京大）：「福島原発事故後の生活変化と健康影響：原発事故被災者が納得して自己決定できる環境を求めて」
11 月 8 日 **封安全**（黒竜江省社会科学院ロシア研究所、中国）「中ロ経済協力の現状と今後の課題」（センターセミナー）
11 月 10 日 **久保田悠介**（学習院大）「《シェストフの執念》に見るボヌフォワとシェストフ」（ユーラシア表象研究会）
11 月 14 日 Nikolay Mitrokhin（センター）、Erika Rondo “Refugee Wave of 2015-2016 in Germany and State Policy of Integration”（センターセミナー）

学　界　短　信

◆　学会カレンダー　◆

2016 年 12 月 8-9 日スラブ・ユーラシア研究センター冬期国際シンポジウム「体制転換から四半世紀：ポスト共産主義社会の多様化を再考する」
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/sympo/2016winter/index-j.html

12 月 17-18 日　九州の未来を考える国際シンポジウム in 北九州「流動する北東アジア：紛争か、協力か」　於北九州国際会議場（北九州市小倉）
http://src-hokudai-ac.jp/northeast/Events/index.html#121718
2017 年 4 月 12-15 日 第 59 回 Association for Borderlands Studies (ABS) 年次大会　於サンフランシスコ　http://absborderlands.org/studies/annual-meetings/
6 月 15-17 日 第二回比較経済世界大会　於サンクトペテルブルク
http://www.jaces.info/info.html
7 月 13-14 日 スラブ・ユーラシア研究センター夏期国際シンポジウム　［編集部］

図書室だより

◆ 「シベリア・極東所蔵資料ギャラリー」コンテンツの追加 ◆

図書室は、所蔵するユニークな地図・写真資料を中心に紹介するウェブサイト「シベリア・極東所蔵資料ギャラリー」を運用していますが、この 10 月、いくつかのコンテンツを追加しましたので、お知らせします。

地図については、サハリンに関する次の地図を追加収録しました。

①「樺太交通一覧」（1909 年頃）

日露戦争後、日本の統治下に入ったサハリン南部の交通路を表現した略図で、1909 年ごろの状況を表すものとみられます。大泊・豊原間の鉄道と、大泊から豊原を経てサカイハマに至る道路、豊原から山越えして真岡に至る道路が実線で描かれていますが、他の道路は点線で、ほとんどが海岸に沿っています。また、航路が多く描かれ、小樽を起点に、海路が多く用いられた状況を伝えています。青と黒の 2 色刷り。版元は表示されていません。

②「北樺太郵便逓送要路図」（1920 年 11 月）

北緯 50 度線の「第二ハダンサ駅舎」から内陸部を北上してルイコフ、デルビンスコエを通り、更に北上して東海岸のノグリキ、ハンツーザに至る道と、デルビンスコエから西海岸の亜港に至る道を描く手書きの図で、その間に設置された郵便局、継立所、駅舎の位置と里程を表示します。黒と赤の 2 色使用。縮尺は 50 万分の 1、右下に「薩哈嗹州派遣軍司令部」とあります。

③「アムール水道附近冬期交通要図」（1921 年 2 月）

ガリ版刷りで、縮尺は 50 万分の 1。黒の単色刷り。冬期に結氷する間宮海峡上にできる北サハリンと大陸との連絡路を「犬橇道」「馬（大）橇道」「電線」として示します。左下に「薩哈嗹州派遣軍司令部」と表示があります。

④「オハ及バイカル附近二万五千分一図」（1926 年）

黒の単色刷りの図で、全 8 枚のセットです。「大正 13 年略測図」とありますので、「保障占領」中の航空測量をもとに作成したものと見られます。この地図については、センターニュース 138 号 (2014 年 8 月) で紹介したことがありますが、本センター以外には所蔵の確認されていない外邦図です。

⑤「樺太全島新地図」（1924 年、訂正第 7 版）

函館の小島大盛堂の発行した多色刷りの図で、サハリン島全体と、それに向かい合う大陸部分の図のほか、オホーツク海・カムチャッカ方面の図と、ウラジオストク周辺の図、および台湾からベーリング海峡までを描き込んだ日本周辺の図を 1 枚に収めています。この時、日本はすでに沿海州から撤兵していましたが、日本周辺図では、沿海州やカムチャッカが、日本の本

土やその植民地と同じ色に塗られているのは、北方進出の願望の表現でしょうか。なお、縮尺は示されていませんが、サハリンとその対岸の図は 140 万分の 1 分程度と推定します。

⑥ 牛島信義氏旧蔵オハ油田地図（1930 年代）

センター図書室は、2012 年に科研費で牛島信義氏旧蔵の北樺太油田関係資料を購入しましたが、そこに含まれるオハ油田地図の画像を公開しました。全部で 5 種類あり、縮尺は 5000 分の 1。青焼きに、一部、手書きの書き込みがあり、油層の調査結果をまとめて、社会用およびソ連の監督当局に提出するために作成したものの写しとみられます。

また、これ以外に、戦時中の参謀本部が発行したサハリンおよびその周辺図 5 枚を新たに収録しました。

写真資料としては、シベリア出兵に関係する 2 種類の写真帖の画像を追加しました。

①「西伯利事変記念写真帖」（1918 年）

シベリア出兵の写真帖は、多くの種類がありますが、帝国軍人会編纂、大正通信社発行のこの写真帖は、1918 年 1 月の軍艦石見のウラジオストク派遣から、4 月の陸戦隊上陸、8 月の出兵開始を経て、ハバロフスク、ブラゴヴェシチェンスク、イルクーツク方面に進出するところまでの公式記録として、参照すべきものと思われます。なお、この資料は、附属図書館本館が所蔵するものです。

②「特務艦関東堪察加冬営記念写真帖」（1922 年）

シベリア出兵期、日本海軍は在留邦人の保護と経済的権利確保のため、カムチャッカに軍艦を派遣しました。特務艦関東はこの任務に当たった艦のひとつで、艦長の七田今朝一大佐以下 300 人余が搭乗して 1921 年 10 月末に横須賀を出港、同年 11 月 6 日にペトロパヴロフスクに到着し、現地で越冬しました。翌年解氷して交代の艦が到着すると、5 月 20 日に現地を発ち、途中コマンドルスキー諸島に寄って、6 月 2 日横須賀に帰りました。

この写真帖には、艦の活動日誌や全乗員の名簿が含まれ、現地の状況や、日本軍の現地社会との関わりを伝える興味深い資料と思われます。なお、この写真帖を所蔵する他の図書館は確認されていません。

会　議（2016 年 9 月）

◆　センター協議員会　◆

2016 年度持ち回り　9 月 16 日（金）～ 9 月 23 日（金）

議題　1. 国際連携研究教育局職員への任命について　［事務係］

みせらねあ

◆　人物往来　◆

ニュース 146 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。［田畑／大須賀］

8 月5-6 日　Laada Bilaniuk（ワシントン大、米国）、Grace Fielder（アリゾナ大、米国）、Robert Greenberg（オークランド大、ニュージーランド）、Christina Kramer（トロント大、カナ

ダ)、Tore Kristiansen（コペンハーゲン大、デンマーク）、Mark Lauersdorf（ケンタッキー大、米国）、Marko Stabej（リュブリャナ大、スロヴェニア）、Curt Woolhiser（ブランダイス大、米国）、三谷惠子（東京大）
8 月 8 日　岩本和久（稚内北星学園大）、大平陽一（天理大）、服部倫卓（ロシア NIS 貿易会）
8 月 12 日　松里公孝（東京大）
8 月 19 日　醍醐龍馬（大阪大・院）
8 月20-21 日井上徹（著述業）、梅津紀雄（工学院大）、亀田真澄（東京大）、坂川直也（京都大）、杉村安幾子（金沢大）、田村容子（福井大）、南雲大悟（日本大）、門間貴志（明治学院大）
8 月 22 日　山脇大（京都大・院）
8 月 24 日　Andrei Gubin（極東連邦大、ロシア）
9 月 13 日　侯瑋紅（中国社会科学院外国文学研究所）、徐楽（同）、侯丹（同）
9 月 21 日　川名晋史（平和・安全保障研究所）、齊藤孝祐（横浜国立大）、山本章子（沖縄国際大）、屋良朝博（フリージャーナリスト）
9 月 30 日　Alexander Bukh（ウェリントン大、ニュージーランド）
10 月 2 日　大島堅一（立命館大）
10 月 3 日　Sergii Geraskov（ドネツィク国立技術大、ウクライナ）
10 月 6 日　Dmitrii Strel'tsov（モスクワ国際関係大、ロシア）
10 月 7 日　封安全（黒竜江省社会科学院ロシア研究所、中国）
10 月 8 日　村田真一（上智大）他、ゼミ生 15 名
10 月 11 日　Ilja Viktorov（ストックホルム大、スウェーデン）、齋須直人（京都大・院）
10 月 20 日　津田敏秀（岡山大）
10 月 21 日　宮本万里（慶應義塾大）
10 月 24 日　金沢美知子（東京大学名誉教授）
11 月 4 日　Sanja Vulić（ザグレブ大、クロアチア）
11 月 5 日　成元哲（中京大）
11 月 10 日　久保田悠介（学習院大）

◆　研究員消息　◆

岩下明裕研究員は 2016 年 7 月 27 ～ 29 日の間、モンゴル科学アカデミーリエゾンオフィス開所式出席及び研究打合せのため、モンゴルに出張。8 月 11 ～ 28 日の間、講義・基調講演及び研究打合せのため、メキシコに出張。8 月 31 日～ 9 月 3 日の間、"Transformed Border in the Borderless World" における講演及び情報収集のため、タイに出張。9 月 14 ～ 17 日の間、セミナー "What Convergence between China's New Silk Road and the Eurasian Union?" 参加及び講演のため、フランスに出張。9 月 23 ～ 26 日の間、「第二回国際境界・海洋問題国際シンポジウム」参加及び報告のため、中華人民共和国に出張。

越野剛研究員は 8 月 29 日～ 9 月 6 日の間、国際シンポジウム「ユートピアからカタストロフィへ：ソビエト文化の実験」出席・研究発表及び研究打合せのため、セルビアに出張。9 月 16 ～ 23 日の間、視察及び資料収集のため、ロシアに出張。9 月 23 ～ 28 日の間、"The 7th East Asian Conference on Slavic-Eurasian Studies" 出席・研究発表・研究打合せ及び資料収集のため、中華人民共和国に出張。

長縄宣博研究員は 9 月 3 ～ 13 日の間、資料調査、インタビュー及び研究打ち合わせのため、ウクライナに出張。

田畑伸一郎研究員は 9 月 4 ～ 18 日の間、欧州比較経済体制学会出席・研究発表、セミナー "Japan in the Arctic: Policies and Priorities" 出席・研究発表、"Russia and the Arctic" 出席・研究発表、会議 "UArctic Congress 2016" 出席・研究発表、聞き取り調査及び資料収集のため、ロシア、ドイツ、フィンランドに出張。

家田修研究員は 9 月 4 ～ 30 日の間、研究打ち合わせ及び資料収集のため、英国、ハンガリー、スロバキア、フランスに出張。

野町素己研究員は 9 月 7 ～ 17 日の間、国際スラヴィスト文法構造研究部会会議出席・研究報告・意見交換及び資料収集・研究打合せのため、ドイツ、チェコに出張。［事務係］

目　次

研究の最前線 1

2016 年度冬期国際シンポジウム《25 Years After: Post-Communism's Vibrant Diversity》開催予告／JIBSN 設立 5 周年記念シンポジウム開催される／UBRJ：沖縄・竹島・北方領土、3 セミナーで延べ 228 人を動員／UBRJ：UBRJ セミナー「南アジア地域における宗教と肉食」を開催／2016 年度特任教員（外国人）決定／国際若手ワークショップの開催／中国社会科学院外国文学研究所セミナーおこなわれる／上智大村田ゼミ学生との合同セミナー／田洪敏氏の滞在／封安全氏の滞在／研究会活動

学界短信 10

学会カレンダー

図書室だより 11

「シベリア・極東所蔵資料ギャラリー」コンテンツの追加

会議（2016 年 9 月） 12

センター協議員会

みせらねあ 12

人物往来／研究員消息

2016 年 11 月 30 日発行

編集責任　大須賀みか
編集協力　宇山智彦
発行者　田畑伸一郎
発行所　北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/